

毅然とした外交姿勢

田川誠一

中国の華国鋒首相が来日した五十五年の五月末、首相官邸で大平首相主催による歓迎午餐会が開かれました。各野党党首とともに私もお招きを受けましたが、宴の終わったあと控の間でしばらく列席者と立ち話をしていた大平さんは、脇にいた伊東官房長官に「駄目じゃないか、田川君の席をあんなところにして……」と、不機嫌な顔をして、私に「失礼なことをしました」と頭を下げました。

飛鳥田、竹入、佐々木の野党党首が、それぞれ主賓や大平首相とメインテーブルに並んでいたのに、新自由クラブ代表の私だけが一般の席にいたのが大平さんの目にとまって、事務的な手違いを指摘したのでしよう。その時、私は「こまかいところまでよく気を配る人」「相手の立場をよく考える人」だと、つくづく思いました。

大平さんとの交わりは、大平さんが一派をつくりあげたころでした。大平さんの周辺には私と同期の代議士が多かったせいか、親しく接する機会がしばしばありましたが、大平さんの真骨頂をみせられたのは、外相当時、日中国交正常化に当たった前後でした。そのころは、与党内で、まだ国交回復を阻止しようとする勢力も強く、大平さんは外交調査委員会など自民党内の諸機関に呼びつけられては、よくつるしあげられました。

とくに四十七年九月に、田中首相とともに訪中する直前には、阻止派の攻撃は大平さんに絞られ、人身攻撃まで浴びせられました。国交正常化の成ったあとも、党内タカ派の日中航空協定に対する反対が強く、ちょうど五十四年秋の『四十日抗争』の時に似たような『大平いびり』が、しばしば繰り返されました。

こんな状態のなかに、大平さんは、少しもぐらつくことなく外交関係を台湾から中国へ切り換えるという政府の方針を貫き通しました。この毅然とした態度に、私たち国交回復促進派は拍手カッサイを送りましたが、おそらく主流、反主流を問わず、大平さんを再認識したのではないでしょう。総裁を目指す領袖として党内に敵をつくりたくない、というところでしょうが、反大平のタネがまかれることを承知のうえで良しと決められた外交方針を貫かれたことは、指導者として模範を示されたような気がしました。

大蔵大臣の当時、まだ自民党に在籍していた私は、東京の後援者を集めて、大平蔵相を招き、講演をお願いしたことがあります。普通ならば、話の前後に当の代議士の「ちょうちん」を持つところでしょうが、その時、大平さんは、ひと言も私のことに触れないで、「財政」の話をされて帰りました。大平さんほどではないが口の重い私には、寡黙で心にもないお世辞など口にできないところが、むしろ「さわやか」に感ぜられました。

また保利氏が、五十年一月初めて訪中する時、「橋渡し役」で一緒にお伴をしましたが、出発前に、その説明に大蔵省の大臣室に大平さんを訪ねたことがありました。大平さんは、保利さんの訪中で周恩来首相ら中国首脳と交わりを結ぶことは、将来の日中関係に大きな影響を与えるとして、非常に喜んでいましたが、この時の大平さんとの話のなかに、大平さんと保利さんとが、お互いに、かなり信頼関係を持つようになっていたことがわかりました。

ちょうど、私が中曽根派を脱退した直後でしたが、別れるとき「田川君、さみしい思いをさせませんよ」といわれた一言が、いまでも私の頭にこびりついています。

(衆議院議員・新自由クラブ代表)